意外と万能な風使い

迅雷の戦斧

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作うろ覚えの転生者が、イ・ウーのメンバーになって、なるべくみんなが幸せになれる未来目指して頑張るお話。

注意！　感想への返信は基本的に行いません。理由は、本編執筆の時間を多くとりたいからです。感想はきちんと読みますので、よろしくお願いします。

目　次

始まる運命 ―― 1
それぞれの運命 ―― 7
勇者になりたくなかった俺はしぶしぶ勇者になることを決意しました ―― 12
名前を呼んで ―― 18
男の戦い ―― 28

始まる運命

俺の名前は柊（ひいらぎ）　亮太（りょうた）、１４歳。俺は今、
「どうだね？我々イ・ウーのメンバーにならないかい？」
見知らぬおっさんに、よくわからない勧誘をされていた。

俺、柊　亮太は転生者というやつだ。
テンプレのように神様のミスで死んで、テンプレのように特典をもらって、テンプレのように転生した。
俺が転生したのは「緋弾のアリア」というライトノベルの世界らしい。俺は緋弾のアリアはアニメでしか見たことがなく、また一度だけだったのでかなりうろ覚えだ。緋弾のアリアと言われて、「ああ、そんなのもあったねー」と思う程度だ。
自分が転生者だと思い出したのは、１０歳の頃。転生後の俺の親が交通事故で死んだタイミングだった。ある意味ではこれもテンプレ通りと言えばそうなのだが、今までの１０年間俺を育ててくれた人たちだ。記憶を取り戻した日の夜、一人枕を涙で濡らしたのは今でも覚えている。
それ以来、俺は神様からもらった特典を鍛えて、それを利用して生きてきた。俺がもらった特典は３つ。正確には５つなのだが、神様曰く「特典ともいえない特典だからサービスでつけてやる」ということで、２つ余分にもらっている。
俺がもっらた物は、
「ドラえもんの、のび太の特技すべて」
「ハヤテのごとく！の、綾崎ハヤテの執事能力すべて」
「ソードアート・オンラインの、キリトの全スキル」

「機動戦士ガンダムの、アムロ・レイ並のニュータイプ能力」
「東方Ｐｒｏｊｅｃｔの、射命丸文の『風を操る程度の能力』」
この５つだ。この内、最初の２つがサービスで、後の３つが特典である。
この世界は、「武偵」という存在がいることを覚えており、確か銃を使う人たちだった気がしたので、射撃が得意なキャラの力をもらおうと思って手に入れたのが、のび太の特技だ。のび太は、宇宙一の殺し屋との早打ち勝負すら勝てるぐらいの射撃の腕があるので、最適だと思った。神様も「この世界ではある意味、射撃能力は必須スキルだ」といってサービスでくれた。まあ、射撃以外の特技は、昼寝とあやとりと言った必要ない能力なので、神様もサービスしてくれたようだ。
綾崎ハヤテの執事能力は、家事全般につかえるので欲しかった。あれだけの家事スキルがあれば、一人暮らしでも全く問題ないだろう。ちなみに、何故「執事能力」と態々限定したのかというと、全能力頼むと、綾崎ハヤテの不幸体質まで受け継ぎそうで嫌だったからだ。それと、単純な身体能力は綾崎ハヤテを基準にしているので、体は異常に丈夫だし、運動神経も高い。執事として、自分の主を守るためにはある意味必須な能力だったらしいので、もらえたのだ。
キリトの全スキルは、最初、ソードアート・オンラインの全スキルをもらおうとして、よくよく考えてみたらそこまで詳しくなかったことを思い出して、キリトのスキルだけに絞ったものだ。
ニュータイプ能力は、絶対に欲しかった特典だ。だって、銃で撃たれて躱せる自信がないからだ。さっきも言ったが、この世界は銃を撃つ武偵という存在がいる。原作の流れを覚えてないので、自分が思うように生きるつもりだが、もし武偵や犯罪者に銃で撃たれても、躱せるようにニュータイプ能力が欲しかったのだ。これがあれば、不意打ちにも対処できるから、生存率がグンッと上がるはずだ。
最後の風を操る程度の能力は、この世界には超能力を使う「超能力者（ステルス）」という存在がいて、火や氷を出せると神様から聞いたので、俺も超能力者として風を操れるようにしてもらった。
さて、これらの中々にチートな特典をもらった俺は、親の死後、そ

れらのチートを使い一人で生きてきた。親戚の人たちにばれないよう、親の残した遺産（貯金）をもって旅に出た。旅をしながら、能力の練習や応用技の開発などを、繰り返して強くなっていった。
そんな生活を４年間を続け、ふと立ち寄ったある国の海岸沿いで俺はあるおっさんに会ったのだ。

そんなこんなで、そのおっさんに勧誘されたわけだが、俺からすれば全く意味が分からない。イ・ウーってなんだよ。エ〇ユーの仲間かなんかなのか？俺、携帯持ってねーよ。それ以前に、このおっさん誰だよ。
「いきなり知らないおっさんに勧誘されても、対応に困るんだが？」
「おっと、これは失礼。僕の名前はシャーロックホームズ。イ・ウーのリーダーで、教授（プロフェシオン）と呼ばれている。よろしく、柊　亮太君？」
・・・この際、俺の名前を知っているのはいい。俺を知ってるから勧誘に来たんだろう。問題はこのおっさんの名前だ。
シャーロックホームズってあれか？推理小説に出てくる創作の中の架空の人物。前世も今も全く推理小説は読まなかったが、そんな俺でも知ってる有名な名前だ。
偽名か？と思ったが、今俺がいる世界も創作の世界だった。なら、このおっさんも本当にシャーロックホームズかもしれない。だが、一つだけ気になることがある。
「シャーロックホームズは今からかなり昔の人物だ。もうとっくの昔に死んでいるはずだ」
そう、具体的な年数はわからないが、少なくとも人が生きていられる年数をはるかに超えるぐらい、シャーロックホームズは昔の人物のはずなのだ。

「運よく、不老になる方法を見つけた、と言っておくよ」
そう言って、俺に微笑んでくるホームズ(仮)。その言葉が真実かどうかは、わからない。普通なら「ありえない」といって切り捨てるが、この世界が創作の世界だと知っている俺からすれば、そうも言っていられないのだ。
「これ以上考えても仕方ねぇーか。んで?なんで俺を勧誘した?」
「そうだね・・・。理由があるとすれば、僕の条理予知(コグニス)が、そうした方がいいと推理したからかな」
また新しい言葉が・・・。なんだよコグニスって。しかも「推理した」って意味が分からん。
「・・・イ・ウーってのは、どんなところだ?」
「簡単に言えば学校のようなところだよ。」
「は?学校?」
「そうだよ。様々な才能を持つ者たちが集まり、互いの知識を教えあい、それぞれの目標に向かって頑張っていくところさ」
思った以上にまともそうなトコだな。だが、俺の直感が、危険信号を発していた。
「それだけじゃないんだろ?」
「察しがいいね。彼らの中には目標のために犯罪を起こす者や、犯罪行為そのものが目標の者もいる。勘違いしないでほしいのは、イ・ウーは犯罪者の集団ではないということだ。メンバーには全く犯罪行為をしていない者も、当然いる」
「でも、犯罪行為をした奴の方が多いんだろ?」
「否定ができないのが痛いところだね」
あの名探偵、シャーロックホームズが、今や犯罪者多数の集団のトップとは・・・。コナン君が聞いたら卒倒するんじゃなかろうか。
「さて、それでは柊　亮太君。君は我々、イ・ウーのメンバーになってくれるかい?」
「嫌だといったら?」
「疲れるからあまりやりたくはないのだがね」
要するに、力づくですねわかります。

さて、俺がこの勧誘を断るには、目の前のホームズ（仮）・・・めんどいから、もうホームズでいいか。ともかく、そのホームズを倒さなければいけない。なら勝てるのか、と言われると、ぶっちゃけ多分無理。奥の手中の奥の手を使えば、勝率が五分五分になるが、その奥の手には時間制限がある。そうなったらもう勝てない。俺のニュータイプとしての直感が言っている。

となると、俺ができる回答は一つしかない。

「わーったよ、イ・ウーに入ってやるよ」

「ふ、そうか。なら、これからよろしく、柊　亮太君」

「こっちは、できればよろしくしたくないんだけどな」

「まったく、つれないね君は」

「うるせぇ」

こっちは、不本意なんだよ。

「で、これからどうするんだ？」

「なら、イ・ウーの本拠地に行こう。もうすぐ来るはずだよ」

そう言って海の方を見つめるホームズ。来るって迎えが？と思った俺は同じように海を見て。

海が持ち上がるのを見た。

「・・・は？」

海の中から現れたのはとてつもなく巨大な潜水艦だった。その船体には「伊・U」の文字が。

「おいおいまさか、本拠地って・・・！」

「そうだよ、あれがイ・ウーの本拠地である、原子力潜水艦だ」

なんつーもんを本拠地にしてんだよこいつらは！

俺は、突如目の前に現れた巨大な原子力潜水艦を前に、ただただ呆然とその巨体を眺めることしかできなかった。

さて、ホームズに連れられて潜水艦に乗船したんだが、
「あなたがリサの勇者様なのですね・・・！」
初めて会った美少女に詰め寄られて困ってます。
ホント誰だよ、お前。

それぞれの運命

〈リサｓｉｄｅ〉

リサがイ・ウーにやってきてから、もうかなりの時が経ちました。

もともと、私がイ・ウーにやってきたのは、私の意志ではありませんでした。

私の一族は、「勇者」と呼ばれる、強い方に仕えることで、代わりにその方に守ってもらい、寵愛を受け、子孫を残してきました。リサの母も、祖母も、曾祖母も、そうやって一族の血をつなげてきました。

しかし、今の時代、勇者と呼べるほどの人はほとんどいません。私がイ・ウーにいるのも、私の勇者様になってくれる人を探すためでした。

結果として、リサの勇者様は見つかりませんでした。勇者様にふさわしい強さを持った方は多くいましたが、犯罪者が多いイ・ウーでは、身も心も勇者にふさわしい方はいませんでした。

それに、リサはイ・ウーでは役立たずと呼ばれていました。

リサは会計などの事務作業や、家事全般が得意です。イ・ウーでも、そのような仕事を中心に働いています。でも、戦うことはおろか、傷つくことも嫌いなリサは、血の気の多いイ・ウーメンバーからは、邪魔者扱いを受けていました。

特に、イ・ウーのＮｏ．２であるブラド様からは、会うたびに酷い仕打ちを受けています。ブラド様は、私が怯えている様子を見るのが好きなようで、いつも私を脅してきます。リサはそのたびに、恐怖し、体を震わして、ただ謝り続けるしかできません。その様子を見て、ブラド様は笑いながらリサの前を去っていくのです。

聞いた話だと、ブラド様とその娘のヒルダ様は、ある少女に日常的に暴行を加えているらしいです。でも、リサは詳しく知ろうとは思いません。下手にかかわって、リサが暴力を振るわれるのが怖いからです。

リサには力があります。ブラド様にも負けないぐらい強い力が。でも、リサはその力が嫌いです。傷つくことが嫌いなリサは、傷つく

可能性があるその力がきらいです。
だから、使わない。
どんなに、ひどい目にあってもその力だけは使いたくない。
だからリサは、いつか、リサの勇者様がリサを助けてくれることを、夢見ていました。ですが、いつまでたってもリサの勇者様は、現れませんでした。
もしかしたら、世界のどこにもリサの勇者様はいないのではないか。そう考えて、リサは怖くなりました。そしてリサは、イ・ウーのリーダーである、シャーロック様に相談することにしました。
――――――条理予知（コグニス）。シャーロック様の持つ天才的な頭脳と、神がかり的な直感を合わせることで、未来予知の段階まで進化した推理能力。これならば、リサの勇者様がどこにいるのか推理できるはず。逆に推理できなければ、リサの勇者様はこの世のどこにもいないことになります。
シャーロック様は、快くリサのお願いを聞いてくださいました。シャーロック様が、条理予知（コグニス）を使っている間、リサは緊張したまま、その結果を待っていました。
しばらくして、シャーロック様は少し口元を緩めたかと思ったら、リサに「少し、散歩に行ってくるよ」と言って、どこかに行こうとしました。まだ、結果を聞いていないリサは、リサにしては珍しく少し声を大きくして、シャーロック様に結果を尋ねました。すると、シャーロック様は、こう答えてくれました。
「僕が、今から行く散歩で出会う少年・・・、彼が君の勇者になる人物だよ」
その時、リサは頭が真っ白になってしまいました。少しずつ頭が落ち着いてくると、先ほどのシャーロック様の言葉の意味に、再び驚愕しました。
リサが、ずっと待ち焦がれていた勇者様。でも、まったく現れなかった勇者様。その勇者様に、今日、シャーロック様はお会いになるらしい。
リサが気づいたときには、シャーロック様すでに、どこかに行って

しまわれていました。リサは、シャーロック様が帰ってくるのを、ただ待っていることしかできませんでした。
シャーロック様は「出会う」としか言っていませんでした。「仲間になる」とは言っていませんでした。なので、シャーロック様が、その少年を連れて帰ってきてくれるのを、リサは祈ることしかできませんでした。
そして、シャーロック様が帰ってきたとき、シャーロック様は一人ではありませんでした。
シャーロック様の隣を歩く少年。黒い髪に黒い瞳、肌の色や顔つきからアジア系の人物。顔は、比較的整っており、体つきは中肉中背、不必要な筋肉や脂肪はすべて取り払ったようなバランスの良い体系。そして何より、シャーロック様が隣にいるのにかすむことのない、強者のオーラ。
彼を見たとき、リサはすべてを理解しました。リサは、彼に仕えるために、彼と生きていくために生まれてきたのだと。
リサは、気がつけば彼の前に立って、その手を取りながら、呆然とする彼に向かって言っていました。
「あなたがリサの勇者様なのですね・・・！」
これがリサと、生涯仕えることになる勇者様――――柊　亮太様との、運命の出会いでした。
〈リサｓｉｄｅ　ＥＮＤ〉

〈シャーロックｓｉｄｅ〉
僕は目の前に立つ少年――――柊　亮太君を、興味深く観察していた。
きっかけは、イ・ウーのメンバーであるリサ君の相談だった。

彼女は、自分の勇者になる人物を、条理予知（コグニス）で推理して欲しいと頼んできた。彼女の一族のことを知っていた僕は、快く引き受けることにした。すでに、最高レベルまで到達している条理予知（コグニス）だが、使わなければ衰えてしまう。そういう意味でも、彼女の望みを叶えるのも、やぶさかではない。

結果、僕はこの後、リサ君の勇者となる人物に出会うことになることが分かった。

しかし、そこまでだった。

出会うことはわかったが、その後どんな会話をするのか、イ・ウーのメンバーになるのか、会った後のことがまったく推理できなかった。

こんなことは、ここ数十年間なかったことだ。僕は、その少年に強い興味を持った。

そして、彼を実際に目の前にして、その異質さに内心、驚愕を隠せない。

僕の条理予知（コグニス）は、相手の十手先どころか、百手先だって推理することができる。そんな僕が、一手先までしか正確に推理できない。その一手先だって、頻繁に変わっていく。こんなことがあるとすれば、それは相手が自分と同じ条理予知（コグニス）の持ち主か、相手の行動を先読みできるだけの、直感を持つ者しかいない。

前者はあり得ない。もし本当に条理予知（コグニス）を持っていれば、彼は僕に質問することなく、すべてを理解できるはずだ。まあ、わかっていてあえて聞いてきた可能性もあるけれど。

となると後者なのだが、そうなると彼の直感力は僕と同等かそれ以上だ。僕ですら、直感で考えた結果を頭脳で考えて、初めて条理予知（コグニス）として機能するのだ。それなのに彼は、直感だけで、条理予知（コグニス）に近い予測を立てていることになる。

前者なのか後者なのか、はたまた僕ですら思いつかない要因なのか。それでも、ただ一つ確かなことがある。

僕は今、数十年ぶりにとんでもない「未知」に出会ったということだけだ。

気持ちが昂り、遠い過去を思いだす。まだ僕が若かったころ。大怪盗、アルセーヌ・リュパンとの死闘の数々、ワトソン君と事件解決に奔走した日々。

もうずっと昔に無くしてしまったと思っていた、未知へと挑戦する探偵としての熱い想い。その想いを、目の前の少年から感じたのだ。

僕はもう長くない。死に場所も何もかも決めた。それなのに、僕は目の前の彼を理解したい、超えたい。そんな想いがあふれてきて止まらない。

きっと彼は、リュパン以来の、僕の生涯最後のライバルになるにふさわしい人物だと、僕は彼を評価した。

リサ君には悪いが、彼をイ・ウーに勧誘したとき、断って欲しかった。そうすれば、僕と彼は戦うことになる。その戦いはきっと、ものすごい死闘になる。それが楽しみだった。僕は、年甲斐もなくそんなことを思っていた。だから、彼が勧誘を受けたとき、少しがっかりしたのは内緒だ。

まあ、いいだろう。まだ、僕の寿命まで数年の猶予がある。

それに、僕は探偵だ。単純に戦うのではなく、探偵らしく頭で勝負してみるのもいいだろう。

やれやれ、血の気が多いイ・ウーメンバーに感化されすぎたかな？そんなことを考えながら、僕は隣で呆然とイ・ウーの本拠地である原子力潜水艦を見る彼を見る。

――――――さて、君は僕に一体どんな未来を見せてくれるんだい、柊　亮太君？

この日僕は、忘れることができない、運命の出会いを果たしたのだった。

〈シャーロックｓｉｄｅ　ＥＮＤ〉

勇者になりたくなかった俺はしぶしぶ勇者になることを決意しました

さて、ホームズに連れられてイ・ウーの本拠地に来たわけだが。
「あなたがリサの勇者様なのですね・・・！」
初めて会ったはずの少女に詰め寄られています。どうしてこうなった。
「えーっと、俺達ってどっかで会ったことあるっけ？」
「いえ、リサと勇者様は今日、初めて会いました」
よかった。俺が忘れていたわけではなかったようだ。
にしても、この娘、相当な美少女だ。白っぽい金髪は、腰あたりまで伸びており、見ただけでサラサラだとわかるほど綺麗。瞳は澄んだ青色、多分サファイアブルーって言うのか？そんな色で。白い肌は彼女の儚さを引き出していて、少し下がった目じりと合わせて、守ってあげたくなるような雰囲気を持っている。体つきは、出るとこは出て、引っ込むところは引っ込んでいる。俺が、前世を含めて見たどんな女の子よりも、可愛いと思える程の美少女だった。
「君の名前は？」
「あ、すいません。自己紹介がまだでしたね。私はリサ。リサ・アヴェ・デュ・アンク。気軽にリサとお呼びください」
「わかった。俺は柊　亮太。俺も亮太でいい。よろしくな」
「柊・・・亮太様・・・、私の勇者様・・・」
俺の顔をボーっと見つめてくるリサ。少し恥ずかしい。
しかし、さっきから俺のことを「勇者様」と呼ぶのはなんでだろうか？気が付かないうちに、魔王を倒す役目でも背負ったのだろうか。
「さっきから言ってる勇者ってなんのことだ？」
「私の一族に伝わる風習です」
そういって、彼女は自分の一族について話してくれた。

～少女説明中～

「・・・というわけで、リサの一族は代々、勇者様に仕えてきたのです」
「ふ～ん・・・」
なるほど、道理で彼女みたいな娘がこんなところにいるのか。さっき手を取られたとき、その華奢な手を見て彼女が戦いを好まない性格なのはわかっていた。その理由が、勇者様探しとは・・・、白馬の王子様願望とかいうのと一緒だろうか。
「リサがイ・ウーにいる理由や、勇者を探している理由はわかった。でも、一つだけ気になることがある」
「はい、なんですか？」
「なんで、俺が君の勇者なんだ」
「それは、僕がそう推理したからだよ」
俺が一番の謎をリサに問いかけると、代わりにホームズが答えた。
「あ、まだいたんだホームズ」
「本当に辛辣だね君は。それと僕のことは、シャーロックか教授（プロフェシオン）と呼んでくれ」
「了解、シャーロック。で、なんでだ」
「ん？あぁ、君が勇者である理由だったね。それは、僕が条理予知（コグニス）でリサ君の勇者となる人物を推理したら、君がそうだと結果に出たからね」
「そーなのかー。・・・って、ちょっと待て。なら、アンタが俺を勧誘した理由って・・・」
「もちろん、リサ君のためだ（もっとも、今はそれだけではないがね）」
なんだよそれ。もう八割がたテロ組織みたいなイ・ウーへの勧誘理由が、「女の子の勇者になって欲しいから」って、それでいいのか。なんか以外にゆるそうだぞ、この組織。
「あ、あの～」
「ん、どうした、リサ？」
シャーロックと話していると、リサが遠慮がちに聞いてくる。

「もしかして、リサの勇者様になっていただけないのですか？」
「それは・・・」
は、反応に困る・・・！彼女にとって勇者というのがどれほど大切なのかは、彼女自身が説明してくれた。だからといって、今日初めて会った人にいきなり「私の勇者様になってください」とか言われても困る。
「――――っ！お願いします！どうか・・・どうか、リサの勇者様になってください！」
返事を渋る俺を見て、拒絶されると思ったのか、リサが頭を下げてきた。その様子から、彼女がどれほどこの時を待ち望んでいたかがうかがえる。
「僕からもお願いするよ」
シャーロックまで、俺に頼んできた。
「彼女は今まで、イ・ウーで積極的に働いてくれていた。自分の勇者が見つからないにもかかわらずだ。そんな彼女だ、報われて然るべきだと僕は思うよ」
そういわれると、確かにその通りなのだが。でもな～。
「も、もちろん、リサはなんでもします！リサが傷つかないなら、勇者様の身の回りのお世話はもちろん、望まれるのなら、よ、夜伽のお相手も・・・アゥ!?」
とんでもないことを言い始めたリサに、デコピンをして話を遮る。
「女の子が軽々しく『夜伽の相手になる』とか、言ってはいけません」
「う～～～、申し訳ありません・・・」
額をさすりながら謝るリサ。まあ、彼女にはそれだけの覚悟があるということか。
・・・しゃーなしだな。
「わかったよ、リサの勇者になってやんよ」
「ホントですか！ありがと「ただし！」うござ・・・え？」
「俺のことを『勇者様』と呼ぶのは無しだ」
「わ、わかりました。それではご主人様と「却下」・・・えー！それでは、なんとお呼びすればよろしいのですか！」

「そんなの、気軽に亮太って呼べば「ダメです！」・・・、ハァ～、わかったよ。なら、俺の名前に様付で呼んでくれ」
「わかりました、亮太様♪」
こうして、俺はイ・ウー所属初日に勇者になりました。どうしてこうなった？

「・・・て・・・。おき・・・てくだ・・・。起きてください」
少女の声で、俺は眠りから目を覚ます。
「・・・えっと・・・、誰？」
「リサでございます、亮太様」
まだ少し寝ぼけている俺に向かって、目の前の少女――――リサが微笑む。
少し時間が経つと、だんだん頭が働いてくる。
俺が、イ・ウーのメンバーになって二日目の朝。
昨日リサの勇者になってから、いろいろなことを話し合った。
結果として、リサは、俺の専属メイドに近い形になった。なぜ、近い形なのかというと、俺が来るまでリサがやっていた仕事は、そのままリサが継続してやることになったからだ。ただ、その仕事の量は、元々の半分以下になり、また仕事中であっても俺の命令優先であることが決まった。
正直言って、綾崎ハヤテの執事能力を持っている俺にメイドは不要なのだが、リサ本人がすごい楽しそうに、料理や掃除をしてくれるので、本人のしたいようにさせている。
その後、俺の私室として今いる部屋に案内され、さっさと夕食と風呂（部屋備え付けのシャワー）を済まして寝たのだ。
そして、今起きたわけだが・・・。

「おいリサ。俺は部屋のカギは掛けたはずなんだけど？」
「シャーロック様から、合鍵をもらっていますから」
おいこらシャーロック。なに、渡してんだよ。俺のプライバシーはどうなってんだ。
「シャーロック様は『専属メイドなら、持っていた方がいいだろう』って」
違う、近いだけで専属じゃない。と、言いたかったが、イキイキと朝食の準備をしているだろうリサを見ると、とてもではないがそんなことは言えなくなる。
俺は、はぁ～っと溜息を吐きながら、リサの朝食を食べ始めるのだった。
ちなみに、とてもおいしかったです。

「さてと」
朝食を食べ、着替えを済ませた（リサが手伝うと言ったが、全力で却下した）俺は、イ・ウーの本拠地である原子力潜水艦を見て回る為、出かけようとしていた。
リサは今日は仕事がないらしく、俺についてくるらしい。まあ、俺も案内が欲しかったので、丁度良かったのだが。
俺が案内を頼んだときリサは、「わ、わかりました！全力で案内させていただきます、亮太様！」と言っていた。そういえば、俺が何かをリサに頼むのは、これが初めてだった。そのせいか、めちゃくちゃ張り切っているようだ。
「（ガチャ）さて、どこから行こうか「ちょ、ちょっとどいて～～！」・・・ん？」
部屋を出た途端、誰かの叫び声が聞こえてきて、ふと横を向くと、一

人の少女がこちらに走ってきていて・・・って！
「フグッ!?」「ムキュッ!?」
案の定、俺と少女はぶつかってしまった。
「だ、大丈夫ですか、亮太様!?」
「お、おう。大丈夫だ」
心配するリサに答えつつ、俺は立ち上がり、ぶつかった少女に手を差し出す。
「立てるか？」
「う、うん、ありがと。これぐらいなら大丈夫」
そう言って、彼女は立ち上がる。
「あれ、君見ない顔だね。だれだれ、新人さん？」
「ああ、柊　亮太だ。これからよろしく」
「うん、よろしくね！え～っと、リョーくん！」
「お、おう。で、君は」
いきなりあだ名で呼ばれて、少し困惑しながら、目の前の少女の名を尋ねる。
髪は金髪だが、リサと違い、一目見てわかるくらい完全な金髪。多分、ハニーゴールドとかいうやつ。その髪を、腰あたりまで伸ばし、一部をツインテールにしている。さらにパーマをかけているのか、ウェーブがかかっている。瞳の色も金色。そして、リサより小柄であるにもかかわらず、リサに勝るとも劣らない大きな胸。儚い感じのリサと違い、元気な印象を受ける美少女だった。
しかし俺は、そこまで詳しく見る余裕などなかった。なぜなら、俺は彼女を知っているから。
「緋弾のアリア」という作品が、うろ覚えの俺でも覚えている、物語の中心人物の一人。
「私の名前は、峰（みね）　理子（りこ）！りこりんって呼んでね！」
そう言って、彼女――――――峰　理子は、俺に手を差し出してきたのだった。

名前を呼んで

「ねぇねぇ、リサ。次はこっちの服を着てみてよ！きっと似合うと思うよ！」
「り、理子様？これは少し恥ずかしいです・・・」
「大丈夫、大丈夫。それを着ればリョーくんのハートも一発だよ！」
「りょ、亮太様のハートを・・・」
「うん、そうだよね、リョーくん！」
「え、あ、まあ、うん、そ、ソウダネー」
「な、なら着てみます！亮太様、理子様、少々お待ちください！」
「いってらっしゃ～い」
理子に渡された服をもって脱衣所に行くリサ、それを手を振りながら見送る理子。そして、そんな様子をただただ眺めるだけの俺。
こうなった理由は、数時間前までさかのぼる。

「私の名前は、峰　理子！りこりんって呼んでね！」
そう言って、俺に手を差し出す少女――――峰　理子。
俺は彼女を知っている。ほとんど忘れてしまっている原作知識だが、それでも覚えているのは、彼女が物語の中心人物の一人だからだろう。もっとも、どんな内容なのかは思い出せないが。
「あ、あぁ。よろしく、理子」
そう言って、彼女の手を取る。
「もー！りこりんって呼んでって言ったじゃん！呼ばないと、ぷんぷんがおーだぞ！」
「わ、悪い悪い。その呼び方は、ちょっと恥ずかしい」
「ん～、しょうがないな～。なら理子でいいよ」

少し不服そうだが、許してくれた。「りこりん」なんて、恥ずかしくて、とてもじゃないが呼べん。
「およ?後ろの女の子も、理子と初めて会うね。名前はなんていうの～」
理子が、俺の後ろに立つリサに気づいて尋ねる。
「私は、リサ・アヴェ・デュ・アンク。亮太様の専属メイドです。よろしくお願いします、理子様」
リサは理子に軽く頭を下げる。というか、専属メイドは決定なんだ。
「リサ・・・」
理子はリサの名前を聞いて、苦虫をかみつぶしたようになるが、それも一瞬。すぐに元の理子の顔に戻る。
「よろしくね、リサ!そんな堅苦しくしなくて大丈夫だよ」
「いえ、もう癖みたいなものですから」
「ふ～ん・・・ま、いっか!理子もリアルメイドさん見れて満足だし!」
うんうん、と満足そうにうなずく理子。
「なあ、理子。おまえ何か急いでたんじゃないのか?」
「え?・・・あーーーーーーーーーーーー!!」
理子は腕時計を見ると、突然大声を出した。
「いっけなーい!それじゃあ、またね!リョーくん、リサ!」
そう言って、手を振りながら去っていく理子。
「あんなに急いで、一体何があったんだ?」
「それは多分、プリンですね」
何気なくつぶやいた一言に、リサが答えてくれる。というか、プリン?
「プリンが一体どうしたんだ?」
「イ・ウーでは、月に一度、シャーロック様の考案で、世界的に有名なお店のお菓子を仕入れてくるんです。『頭を使うには、糖分が大切だからね』ということらしいです。それで、今回のお菓子であるプリンは、世界中に支店がある、超人気デザートなんですよ」

そうなのか。そんなものがあるなら、ぜひ食べてみたい。
「ただ、毎月すぐに無くなってしまうので、今からじゃ難しいですね」
「そうなのか、ぜひ食べてみたかったんだけどな・・・」
「ご安心ください。そういうと思って、朝一に1個買っておきましたから。おやつの時間にでも、お出ししますね」
「本当か!それは楽しみだ」
「亮太様に喜んでいただくのが、リサの幸せですから」
そこまで甘いものに執着があるわけではないが、そこまでおいしいものなら食べてみたくなる。
本当に楽しみだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・(ズ～ン)」
最初の目的通り、リサに本拠地を案内されて、食堂についた時だった。
部屋の隅で体育座りしながら、すごいジメジメしている理子がいた。それだけで大体察した。
「ダメだったか・・・」
「そうですね・・・」
やっぱりプリンは買えなかったようだ。にしても、相当食べたかったんだな。あ、キノコ生えた。
これ以上ほっとくとまずそうなので、理子に話しかける。
「え～っと、理子?」
「・・・何、リョーくん・・・」
誰だコイツ?朝会った時と別人だぞ。
「なんか、その、ごめんな?あの時、俺がお前にぶつからなかった

ら・・・・」
「・・・気にしなくていいよ、リョーくん。人が部屋から出てくることを考えず走っていた、理子が悪いんだよ・・・」
そう言って、より深く落ち込む理子。正直、見ていられない。
「・・・よし、リサ。少しここで理子を見ててくれ」
「え?・亮太様?・」
「リサにしか頼めないだ。それじゃ!」
「ちょ、ちょっと待ってください、亮太様!?」
リサを理子のそばに置いて、俺は部屋に戻る。そこで俺は目当てのものを見つけると、それをもってリサたちのもとへ戻った。のだが・・・、
「・・
(ズ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ン)」
「ど、どうしましょう~~~(オロオロ)」
理子はさらに落ち込み、キノコの数が増えていた。そんな理子をどうしたらいいかわからず、オロオロするリサ。なにこれ、カオス。
「ただいｍ「どこ行ってたんですか!・」っと、悪い悪い。ちょっと部屋にあるものを取りに行っててな」
「あるもの・・・?」
小首を傾げるリサを横目に、理子に近づく
「理子、これ。おまえさえよければ」
「・・・?・」
そう言って差し出したのは、リサが俺のために勝ってきたプリンだった。
「こ、これ今日のプリンじゃん!こ、こんなのもらえないよ!・」
「気にすんな。俺は甘いものが特別好きなわけじゃないし、二度と食えないわけじゃないからな」
俺は、リサの方を向いて言う。
「悪いなリサ。俺のために買ってくれたのに」
「いえ、亮太様がそれでいいのなら、リサは気にしません」
そう言って、微笑んでくれるリサ。それを確認してから、理子に向

き直る。理子は困惑したような顔をして、俺とリサを交互に見ている。
「ほ、ホントに、いいの？」
「さっきからそう言ってるだろ？」
ほら、と手に持ったプリンを理子に差し出す。すると、理子は突然俺に抱き付いてきた。・・・って！
「ど、どうした理子!?」
「ありがとう、リョーくん！理子すっごくこのプリン食べたかったんだ！」
「わ、わかったから離れろ！」
「ぐふふ・・・、よいではないか、よいではないか～」
どうやら、元の理子に戻ったようだ。それはいいんだが、早く離れてほしい。いろいろ当たっていてツラい。
「り、理子様！早く亮太様から離れてください！」
リサ仲裁で、ようやく理子は離れてくれた。
「それじゃあ、ほれ」
そう言って、プリンと一緒に持ってきたスプーンを渡してやる。理子は受け取ると、早速封を開けて食べ始める。
「お～いし～！」
「そいつはよかった。理子は甘いものが好きなのか？」
「うん、甘いものなら何でも好きだよ～」
「それなら今度、俺が何かお菓子を作ってきてやろうか？」
「ホント！」
俺がそう言うと、プリンを食べながらすごくキラキラした目でこちらを見てくる理子。それに俺は、少し苦笑しつつ「ああ」と首肯する。
「絶対だよ！今、理子と約束したからね！後から『やっぱなし』とかダメだからね！」
「こんなことで嘘なんて言わねーよ」
「ヤッタ～～～～～～～～～!!」
綾崎ハヤテの能力の影響か、料理とか家事全般が趣味みたいになってるしな。これから家事はリサが中心になってやっていくことにな

るんだろうが、お菓子作りくらいいいだろう。
「ん～、でもプリンまでもらったのに、ただ作ってもらうのもな～」
「俺は気にしないぞ？」
「理子が気にするの！」
そう言って、理子は少し考えるようなそぶりをした後、何かを思いついたのか、手をポンっと叩く。
「そうだ！今から理子の部屋に来ない？」
「は？でも、男である俺をそんなに簡単に招いて言い分けないだろ」
「モーマンタイだよ。リョーくんに見られて困るようなものは全部しまってあるし、リョーくんになら別に触られたりしても・・・」
「だ、ダメです！絶対ダメです！亮太様にそ、そのようなこと・・・、とにかくダメです！」
理子が何かを言いかけたが、慌ててリサが止めてしまった。
「ふ～ん、やっぱりリサって・・・」
「な、なんですか？」
「べっつに～？ただ、面白そうだな～って」
そう言って、にやにやしながらリサを見る理子。
「そうだ！ねぇ、リサ？ちょっと手伝って？」
「手伝いって・・・何をですか？」
「まだ内緒！でも、リョーくんはきっと喜んでくれるよ！」
「亮太様が・・・、はい！リサも手伝います！」
「うん！というわけで、リョーくんも理子の部屋に来てよ！」
「そうですよ、亮太様！行きましょう！」
リサと理子の二人に詰め寄られる。ここまで言われて断るのも悪い気がする。
「わかったよ。ならお願いする」
「よーっし！それじゃあ、しゅっぱつしんこ～！」
「お～！」
妙にテンションの高い二人について、理子の部屋に向かった。

そうして、冒頭に戻る。
理子の部屋はいわゆるコスプレ衣装でいっぱいだった。本人曰く「変装の練習に使うんだよ」と言っていたが、いくらなんでも多すぎる。
この時点で嫌な予感はしたんだが、次の理子の言葉で現実になる。
「それじゃあ今から、理子とリサによるファッションショーをはじめま～す！」
そう言って、あれよあれよという間に、ファッションショーが始まってしまった。リサは内容を知らなかったようで、最初は反発していたが、理子が耳元で何かをつぶやくと、途端にやる気になり、そこからは多少文句を言いつつ、比較的積極的にやっていた。俺は二人を置いて勝手に帰るわけにもいかず、二人のファッションショーを見ることになった。でも、どっちかっていうと、コスプレ大会の方がしっくりする内容だった。
ゴスロリに始まり、シスター服、巫女服、ナース服、ミニスカサンタ、セーラー服、婦警コス、浴衣、魔法少女、魔装少女ｅｔｃ．
いくつ見たかも覚えていない。ただ一つ言えるのは、二人ともどんな格好もめちゃくちゃ似合っていたということだけだった。
二人のファッションショーは夜中まで続いたのだった。

ファッションショーが終わり、あまりに遅い時間だったので、食堂で夕食を済ませ、俺とリサ、理子は食堂で話していた。この時間にな

ると、食堂に人はほとんどいなくなる。とはいえ、夜遅くに帰ってくるメンバーがいるらしく、食堂は問題なく開いていた。
「今日はすっごく楽しかった！こんなに楽しかったのは初めてだよ！」
「そいつはよかった」
「リサもこんなに遊んだのは初めてです」
俺たち三人は、今日あったことを話していた。よくよく考えてみたら、俺と理子が会ったのは今日が初めてだった。なのに、今では気兼ねなく話せる仲になっていた。
「もう、今日がずっと続けばいいのにな～」
「そいつは困るな」
「どうして？楽しかった日がいつまでも続いてほしいって願うのは、珍しくないでしょ？」
不思議そうに尋ねてくる理子に、俺は答える。
「だってもう一度今日が来たら、せっかくお前と〝友達〟になったのに、また最初からになるってことだろ」
「・・・え？」
俺が言った言葉に、信じられないといったような顔を理子はしていた。
「どうした、理子？」
「・・・今、私のことを〝友達〟って言ったの？」
「そうだけど・・・、もしかして迷惑だった？」
「そうじゃない！そうじゃないけど・・・」
なにか、歯切れの悪い理子。一体どうしたんだ。
「だって、理子とリョーくんたちは、今日初めて会ったんだよ？それなのに・・・」
「なんだ、そんなことか」
「そんなことって・・・」
俺は理子の目をまっすぐに見る。

「理子」
「え？えっと、な、なに？」
「いや、そうじゃなくて、理子」
「えーっと、リョーくん？」
「そう、それだ」
「え、どれ？」
「だから名前だ」
「名前？」
理子は何のことかわかっていないようだ。まあ、俺の前世で見たアニメの真似だし、知らなくても無理はないか。
「俺はお前を『理子』って呼んでる」
「うん」
「お前は俺を『リョーくん』って呼んでるだろ」
「うん、呼んでる」
「いいか、理子。友達になるのに、特別なことは何もいらないんだ。ただ、互いに名前で呼び合う・・・それだけで、もう俺とお前は友達になったんだよ」
「名前を呼び合う・・・」
「そうだ。だから、俺とお前は友達だし、お前とリサも友達だ」
「リサも？」
そう言って、リサを見る理子。リサは理子を見て優しくうなずく。
「はい。少なくとも、リサは理子様のことを友達だと思っています」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
そんなリサの言葉に黙ってしまった理子。少しして、理子が再びしゃべりだす。
「・・・理子は、リョーくんとリサの友達になってイイの？」
「あぁ」「もちろんです」
俺とリサは答える。
「ホントに？」
「ホントだ」
「ホントのホントに？」

「ホントのホントです」
「ホントのホントのホント？」
「ホントのホン・・・あ～もうめんどくさい！」
俺は理子に手を差し出す。
「ほら、友達同士の握手だ」
「・・・・・・・・・っ！」
俺の手を見つめる理子。そして、理子の手が俺の手に伸ばされる。

しかし、その手が重なることはなかった。

「何してんだ？できそこないの４世？」
その声が聞こえた瞬間、理子の手が止まる。そして震えだす。しかも理子だけではなく、リサもだった。
俺はその声のした方を向き、目を見開く。
食堂の入り口に、そいつはいた
そこにいたのは、人間ではなかった。
３メートルはある身長。全身は毛むくじゃらで、長く、鋭く尖った爪と牙。俺の記憶の中でもっとも近いものをあげるなら、狼男あたりだろう。
見るからに化け物。そんな奴がこちらを見ていた。そして奴は嗤う。
「何だ、弱虫のリサもいたのか。なんだ？弱者同士、傷の舐め合いでもしてたのか？」
俺はそいつを知らなかった。
その男の名は、ブラド。『無限罪のブラド』。イ・ウーのＮｏ．２であり、長い時を生きる「吸血鬼」であり。

――――そして、理子とリサを苦しめる元凶だった。

男の戦い

「何だ、弱虫のリサもいたのか。なんだ？弱者同士、傷の舐め合いでもしてたのか？」

突然、食堂にやってきた狼男は、理子とリサの知り合いらしい。しかし、いい意味での知り合いじゃなさそうだ。奴が着た途端、リサと理子の二人が、顔面蒼白にして震えだしたからだ。

「おいリサ、アイツ誰だ？」

「・・・・・・・・・」

「リサ？」

俺がリサに奴の正体を聞いてみたが、リサからの返事はなかった。昨日からリサは俺の役に立とうと、頑張っていた。そんなリサが、俺の言葉になんの反応も示さなかった。

「おい４世」

「・・・・・・・・・・っ！」

ブラドが４世と呼ぶと、理子の肩がビクッと震えた。

「今から俺にちょっと付き合えよ」

「そ、それは・・・」

奴の言葉に、理子の体はさらにガクガクと震えだす。額からは汗が止まらなくなっている。そんな理子を見て、リサが何かを言おうとしてはやめてを繰り返す。それを目ざとく見つけた奴が、標的をリサに変える。

「何だリサ？お前がそこの４世の代わりになるのか」

「い、いえ・・・リサは・・・」

リサは何も言えなくなってしまった。

「無理だよなぁ。テメェは弱虫だもんな？」

そんなリサにさらに追い打ちをかける狼男。それでもリサは、何もできずうつむくしかない。その両手は、スカートのすそを握りしめて震えていた。そして、その目からは涙がこぼれていた。

リサは、傷つくのが嫌いだ。だから、理子の代わりになると言えない。優しいリサは、友達の理子が困っているのに、何もできない自分

が悔しいのだ。昨日からの付き合いだが、それぐらいわかる。
俺は理子を見る。理子の顔は、怒りと悔しさと絶望と、そして何より悲哀の色が強かった。きっと、あの狼男は理子に今まで碌なことをしてこなかったのだろう。
「で、早くしろ４世。俺を待たせるな」
そう言って、狼男は俺たちの座る席に近づく。そこで俺は気づいた。
（こいつ、俺のことが眼中にねぇ・・・！）
俺は、リサと理子と同じテーブルについている。二人に話しかけるなら、俺のことも見えるはずなのに、まったく俺を見ていない。
おそらく、奴にとって人間とは、そこらへんのごみ屑と一緒なのだ。理子やリサに突っかかるところを見ると、すべての人間をそう思っていないかもしれないが、少なくとも今日初めて会った俺は、路上に落ちてる煙草の吸殻程度の価値しか奴にないのだろう。
まあ、今回は好都合だ。なぜなら、
「おい、俺を無視してんじゃ『ガシッ！』・・・アァ？」
こうやって簡単に奴を止められるんだからな！
近くまで来て、理子に向かって伸ばされた狼男の手を、俺が掴んで止める。俺がそうすることが予想できなかったのか、理子もリサも驚いている。
「何だテメェ？俺の邪魔をするんじゃねぇ」
ようやく奴は俺を見た。その目を見て直感した。こいつはヤバい。強い弱いでなく、コイツのあり方そのものがヤバい。
「おい、何か言えよクズが」
いつまでも何も言わない俺に、我慢できなくなったのか狼男が言ってくる。
「・・・触るんじゃねぇよ」
「あ？」
俺の言った意味が分からなかったのか、俺を睨む狼男。だが、まったく怖くない。シャーロックに比べれば、足元にも及ばない。
「こんなクソみたいな手で、俺の大切な友達に触るなっつってんだよ、

三下！」
「「!?」」
俺の言葉に、理子、リサ、狼男は目を見開く。俺がこんな啖呵切るとは思わなかったらしい。
一番最初に正気になったのは、狼男だった。
「て、テメェ！クズの分際でこの俺を『ゴウッ！ドカッ！』ガハッ！」
ドカーーーーーーーン!!
俺が狼男を蹴ると、そのまま奴は壁まで吹っ飛んでいった。理子とリサは、信じられないものを見たように俺を見る。まあ、そうだろうな、狼男の身長は3メートル前後。それを蹴り飛ばして壁にぶつけるなんて、普通できない。
一応、タネも仕掛けもあるのだが今はいい。それより狼男だ。
別に理子にもリサにも助けを求められたわけじゃない。俺が勝手にやっただけだ。完全な第三者である俺が、気安く割って入っていい問題でもないだろう。
でもな、理子とリサは〝泣いてたんだよ〟。理不尽に怒って、奴の力に絶望して、何もできないのが悔しくて。
理子は受け入れるしかないのが、リサは友達を助けることができなくて。
だから、俺がやった。どうしようもない二人の代わりに。二人の仲間として、友達として。
俺は壁に吹っ飛んだ奴に近づき言い放つ。
「さっさと立てよド三流！俺とお前の、格の違いってやつを見せてやる！」
今、俺のイ・ウーでの初めての戦いが始まろうとしていた。

〈理子　ｓｉｄｅ〉

その日の目覚めは最悪だった。

自分の部屋のベッドに体を起こし、私――――峰　理子はさっきまで見ていた夢を思い出す。

それは、私にとって、忘れたくても忘れられない最悪の記憶。

ルーマニアの城の地下牢に閉じ込められた私。そんな私に暴行を加え、高嗤いをあげるブラド。ブラドと一緒に、私に電気を流したりして嗤うヒルダ。

誰も助けてくれない。ツラい記憶。お母様もお父様も死んでしまった私には、頼れる人もいなくて、ただ耐えるしかなかった日々。

それを思い出して、私は震えた。自分の体を抱きしめ震えを止めようとする。

「大丈夫・・・私は、理子は大丈夫、大丈夫・・・」

私の体の震えが止まったのは、それから約一時間後のことだった。

気を取り直した私は、自分がここにいる理由を思い出した。

ある日、ブラドが私を解放してもいいと言ってきた。もちろんタダではないが。

――――シャーロックホームズ４世を倒せ

それが、ブラドの出した条件。

シャーロックホームズ。かつて私の曾お爺様のライバルだった人。

そして、ブラドのいるイ・ウーのリーダー

峰　理子・リュパン・４世。それが私のフルネーム。

私は、アルセーヌ・リュパンの曾孫なのだ。

そんな私にブラドが命じた、ホームズ４世の打倒。きっと、シャーロックホームズ本人への嫌がらせみたいなもの。
ブラドにとって私はほとんど価値がない。
ブラドは、優秀な人間のＤＮＡを取り込んで強くなる吸血鬼だ。
ただでさえ厄介な吸血鬼なのに、奴はＤＮＡを取り込んだだけ強くなるのだ。
私も最初はＤＮＡ目当てだった。でも、私にリュパンとしての才能が遺伝していないことを知ると、私に暴力をふるって、ストレス発散用のサンドバック状態だった。それでも私を殺さないのは、私にＤＮＡ以外に使い道があるからに過ぎない。
きっとブラドは約束を守らない。それでもやらなければならない。なぜなら、失敗すればブラドにお母様の形見であるペンダントが、奪われてしまうからだ。
あれはお母様の唯一の形見なのだ。絶対に奪われるわけにはいかない。
だから、私はイ・ウーに入学した。ホームズ４世を倒すために。
それが私が「４世」でなく、「理子」としている為の唯一の道なのだから。

「よし、りこりん完・全・復・活！」
あれからさらに十数分、ようやく理子はいつもの調子に戻った。
今日は朝から嫌な気分になったが、楽しみがないわけではない。むしろ今日はいつも以上の楽しみがある。
今日は月に一度の、大人気スイーツの入荷の日なのだ。今日のスイーツがプリンなのは知っていた。だから、すぐに買いに行けるように、目覚ましもセットし・・・て・・・。

「って、今何時!?」
目覚ましを見ると、販売開始からすでに一時間。当たり前だ、だって今日、目覚ましで目が覚めたのだから。
私は、甘いものが好きだし、可愛い洋服も大好きだ。ずっと地下牢にいた私は、最低限の食事しか与えられず、着るものも布きれ一枚だった。その反動なのか、私は月一のスイーツをかなり楽しみにしている。
「急がないと売り切れちゃうよ〜!」
私は部屋を飛び出し、廊下を全力疾走した。それがいけなかったのだろう。突然廊下の扉が開いて、中から誰かが出てきたのだ。
「ちょ、ちょっとどいて〜〜!」
私の叫びもむなしく、その人とぶつかってしまった。その人は、見たこともない男の子で、柊　亮太と名乗った。理子がリョーくんと呼ぶと、少し戸惑っていたが受け入れてくれた。
そのリョーくんと一緒にいた女の子。彼女の名前を聞いて驚いた。リサ。それはブラドがちょっかいを出している子の名前だったから。
この子も私と同じ・・・と一瞬考えてしまうが、すぐに考えを改める。朝からブラドのせいで気分がブルーだったのに、これ以上ブルーになることもないからだ。
その後、理子はリョーくんとリサと〝知り合い〟になった。その時、リョーくんのおかげで、理子は本来の目的を思い出して、全力で走った。しかし、ついたときには売り切れていた。
理子はショックのあまり、食堂の隅で落ち込んでいた。そこへ偶然リョーくんとリサが来た。理子に話しかけてきたリョーくんに、少しつらく当たってしまった。するとリョーくんはどこかへ行ってしまった。まあ、ただの〝知り合い〟だし仕方ないかと思っていたら、リョーくんが戻ってきた。そしてリョーくんは、理子に自分の分のプリン差し出してきた。理子は断ったが、結局断り続けるのも失礼なので、ありがたくもらって置いた。
理子にはわからなかった。なんで、ただの〝知り合い〟でしかない

理子にこんなにやさしくしてくれるのか。
その後、リョーくんが私にお菓子を作ってくれる約束をして、そのお菓子とプリンのお礼として、理子の部屋に二人を連れていって、リサと二人でファッションショーをリョーくんにしてあげた。部屋には、理子が趣味で集めた、コスプレ衣装が大量にあったので、衣装には困らなっか。
リョーくんのことでリサを弄ると、面白い反応をしてくれた。理子たちのコスプレを見て、顔を赤くしながらリョーくんはほめてくれた。
すごい楽しかった。こんなに楽しかったのは初めてだった。だから夜ご飯のとき、今日がずっと続けばいいと言ったのは、半ば無意識だった。
だから、その言葉に返事が返ってくるとは思ってなかったし、その内容も予想外だった。
〝友達〟と言ったのだ。リョーくんは確かにそう言っていた。
最初は聞き間違いだと思った。でも、違った。リョーくんは、そしてリサも、理子のことを友達と言った。理子はわからなかった。いつ理子たちは友達となったのか。
リョーくんは何でもないように言った。「名前を呼んだから友達」だと。
つまりだ。
理子が二人を〝知り合い〟だと思ったとき、すでにリョーくんの中では、理子は友達だったのだ。
理子は友達がいなかった。ずっと地下牢にいたし、出てからも、イ・ウーでは目的達成のための勉強しかしてこなかった。ジャンヌとか仲間と呼べる人はいたけど、友達と言える人はいなかった。
理子は二人の友達になってもいいのか?そう思ったが、リョーくんは理子に手を差し出してきた。友達同士の握手だと。
嬉しかった。ずっと一人ぼっちだった。味方は誰もいなかった。そんな理子にできた初めての〝友達〟。
理子はリョーくんの手を取ろうと手を伸ばした。だがそれを邪魔

した奴がいた。
ブラド。理子の、そしてリサの恐怖の対象。
私は運命を呪った。なんで今なんだと。あと少しで、二人と本当の〝友達〟になれたのにと。きっと、二人は私から離れて行ってしまう。そう思った。

だから、リョーくんが私を〝友達〟と言ったことが信じられなかった。ブラドを蹴り飛ばしたことが信じられなかった。

ブラドが壁に吹き飛ぶ。そんなブラドを追って、リョーくんは立ち上がる。
自然と私たちに背を向ける格好となる。その背中を見ると安心してしまった。ブラドの恐ろしさを十分知っているのに、まったく心配な気持ちにならなかった。
ただ、彼なら。この不幸の連鎖を断ち切ってくれるかもしれない。私は純粋にそう思った。

ドクンッ！

心臓が一度、高鳴った気がした。